

昭和天皇の戦争認識

「反省」「軍部の専横」

取りを記した「昭和天皇
拜謁記」の翻刻に携わった
県内外の有識者7人が登
壇。昭和天皇の戦争論や象
徴天皇制への考えについ
て、拜謁記から見えた研究
成果を紹介した。

ていた」とした上で、「し
かし、自分一人では責任を
背負い切れない、国民にも
反省を求めようとの考えだ
った」と解説。「外では言
えない愚痴を田島には漏ら
している」と話した。

基調報告した志學館大学
の茶谷誠一教授（日本近現
代史）は、拜謁記の中にあ
る天皇の戦争に対する認識
に着目。「反省というのは
私にもたくさんあるといえ
ばある。軍も政府も国民も
すべて下剋上とか、軍部の
専横を見逃すとか皆反省す
れば悪いことがある」との
発言を引用し、「昭和天皇
の赤裸々な心情を記した責
重な史料」と述べた。

一方、戦争に至った社会
情勢の一端として、191
8年に起きた白虹事件とい
う新聞弾圧を紹介。「新聞
は弾圧を避け、国家を批判
的に考える情報を提供しな
くなった」と指摘。「学校
では天皇に全てをささげる
よう教育された。神格化さ
れた天皇の権力をかさに着
た人々がやりたい放題でき
る状況ができ、声の大きな
人の意見に国民は流されて
しまった」と述べた。

鹿児島市の志學館大学
で、シンポジウム「昭和天
皇と現代日本」があった。
初代宮内庁長官の田島道治
が昭和天皇との詳細なやり

日本大学の古川隆久教授
（日本近現代史）は戦争に
ついては「天皇は最終的な
決断の責任を負うとは思っ

戦後、象徴天皇制になっ
ても昭和天皇は国内の政治
状況に高い関心を寄せてい
たとの意見も出た。



「昭和天皇拜謁記」
について基調報告す
る志學館大学の茶谷
誠一教授＝鹿児島市
の志學館大学

昭和天皇拜謁記

初代宮内庁長官を務めた田島道治が昭和天皇との
詳細なやりとりを記す。田島は1948年、宮内庁の
前身である宮内府長官に就任、49年から53年まで宮
内庁長官を務めた。資料は「拜謁記」と題された手帳
やノート計18冊にのぼる。

龍谷大学の瀬畑源准教授
（社会学）は、天皇が朝鮮
戦争（1950―53年）の
戦況を気にしていたこと
や、日ソ中立条約を破った
ソ連を信用せず、東西冷戦
下に再軍備や憲法改正が必
要だと考えたと指摘。「首
相の吉田茂に伝えようと
し、政治介入になると田島
が止めている。象徴である
とは分かりつつ、自分の知
見を政治に生かしたいと、
もどかしさを持っていたよ



「昭和天皇拜謁記」について意見
述べる専門家たち

うだ」と語った。

シンポジウムは9日にあ
り、約70人が聴講。このほ
か、名古屋大学准教授の河
西秀哉氏、政治経済研究所
研究員の富永望氏と舟橋正
真氏、ジャーナリストの吉
見直人氏が登壇した。

（上村元大輔）